夜雨對牀

―蘇軾兄弟を繋いだもの―

加納留美子

0. はじめに

北宋の詩人蘇軾（一〇三六―一一〇一）・蘇轍（一〇三九―一一一二）が、生涯を通して敬慕し合い、非常に仲の良い兄弟だったことは廣く知られる。彼らの親愛の情は、特に、互いに贈り合った膨大な數の唱和詩によく表れている。[1]

唱和詩の中でも「夜雨對牀」[2]をテーマに持つ作品群は、彼らの深い愛情を示す好例といえる。「夜雨對牀」とは「雨降る夜に牀（ベッド）を竝べて一緒に雨音を聞く」ことである。その原點は唐の韋應物の詩にあり、唐代既に模倣作が登場していた。だが蘇軾兄弟は從來の詩人に比べ、「夜雨對牀」に一層深い關心を寄せていた。それは彼らの、他に例の無い作品の數及び一貫した內容の兩側面から讀み取ることができる。兄弟は樣々な異なる狀況下で「夜雨對牀」を詠んだが、それらの內容は互いに關連し呼應し合うのである。兄弟が「夜雨對牀」に深い關心を抱いた原因には過去のある經驗があり、各詩の內容の一貫性はその過去に對する時々の想いが發露した爲と考えられる。例えば、二十六歲の蘇軾が鳳翔赴任の際、蘇轍へ贈った留別の詩「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」（以後①「辛丑十一月」と略）[3]の結句には次の樣にある。

寒燈相對記疇昔、夜雨何時聽蕭瑟。君知此意不可忘、愼勿苦愛高官職。

寒燈に相對して　疇昔を記す、夜雨　何れの時か　蕭瑟たるを聽かん。君　此の意の忘るべからざるを知らば、愼しみて　苦だ愛する勿かれ　高き官職を。

本詩には蘇軾の自註「嘗て夜雨對牀の言有り（嘗有夜雨對牀之言）」があり、故にこの「夜雨」が「夜雨對牀」を指すことが分かる。本詩から、分かることが二點ある。蘇軾は「夜雨對牀」を過去や現在の出來事ではなく、將來蘇轍と共に實現したいこととした點。且つ、それは榮達を望めば實現できないとした點である。この二點こそが、兄弟の「夜雨對牀」詩全體に共通する特徵でもあった。では、蘇軾と蘇轍は「夜雨對牀」にどの樣な情景を思い描いたのか。何故それを將來の場と考えたのか。何故榮達と兩立できないのか。

蘇軾兄弟の「夜雨對牀」詩について論じた先行研究は、少數ながら存在する。[4] だが從來の研究は、兄弟にとって「夜雨對牀」が將來の場であることを指摘しつつも、各詩がどの樣な狀況下で詠まれたか、その狀況から兄弟の心情を考察するに留まる。つまり、「夜雨對牀」という表現自體の分析、例えば夜雨のどの樣な性質が親愛の情に通じるのか、夜雨以外の景物を用いた親愛表現と比べ何か差異があるのかについては、一切言及がない。又、韋應物等唐代の用例と蘇軾兄弟の用例の間の異同も未檢討のままである。本論では、蘇軾兄弟の「夜雨對牀」詩の分析を通して、その親愛表現の獨自性、特に兄弟に於いて獲得された獨自性について檢討する。[5] 更にその特徴をより明確にする爲、月による親愛表現との比較考察を行いたい。

Ⅰ．「夜雨對牀」の諸相

Ⅰ－1．唐代の「夜雨對牀」と蘇軾兄弟の「夜雨對牀」

蘇軾が蘇轍に贈った「夜雨對牀」詩は七首、蘇轍が蘇軾に贈った詩は五首ある。[6] 制作年代順に整理すれば、兄弟、特に蘇軾が長期に亘って詠んだことが分かる。以下、制作時の兄弟の年齢（數え年）と所在地を示す。[7]

◎蘇軾詩

	詩題	制作年、兄弟の狀況
①	卷三「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」	嘉祐六年（一〇六一）蘇軾二十六歲（鳳翔へ赴く途次）、蘇轍二十三歲（開封）
②	卷十五「子由將赴南都、與余會宿於逍遙堂、作兩絕句、讀之殆不可爲懷、因和其詩以自解。余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣。而余亦竊聞其一二。以爲今者宦游相別之日淺、而異時退休相從之日長、既以自解、且以慰子由云」其一	熙寧十年（一〇七七）四十二歲（徐州）、三十九歲（南都赴任直前・徐州）
③	卷十五「初別子由」	熙寧十年（一〇七七）四十二歲（徐州）、三十九歲（南都）
④	卷十九「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、以遺子由、二首」其一	元豐二年（一〇七九）四十四歲（獄中）、四十一歲（南都で兄の助命嘆願）
⑤	卷二十二「初秋寄子由」	元豐六年（一〇八三）四十八歲（黃州貶謫）、四十五歲（筠州貶謫）
⑥	卷三十三「感舊詩并敘」	元祐六年（一〇九一）五十六歲（潁州赴任直前・開封）、五十三歲（開封）
⑦	卷三十七「東府雨中別子由」	元祐八年（一〇九三）五十八歲（定州着任直前・開封）、五十五歲（開封）

◎蘇轍詩

	詩題	制作年、兄弟の狀況
i	卷七「逍遙堂會宿二首并引」其一	熙寧十年（一〇七七）蘇軾四十二歲、蘇轍三十九歲（蘇軾詩②と同時期）
ii	卷十「舟次磁湖、以風浪留二日不得進、子瞻以詩見寄、作二篇答之、前篇自賦後篇次韻」前篇	元豐三年（一〇八〇）四十五歲（黃州貶謫）、四十二歲（蘇軾を訪ねる途次）

ⅲ	卷十四「後省初成直宿呈子瞻二首」其二	元祐元年（一〇八六）五十一歳、四十八歳（共に朝廷での榮達期）
ⅳ	卷十五「五月一日同子瞻轉對」	元祐三年（一〇八八）五十三歳、五十歳（ⅲと同じ）
ⅴ	卷十六「奉使契丹二十八首　神水館寄子瞻兄四絕」其二	元祐四年（一〇八九）五十四歳（杭州）、五十一歳（契丹へ使いする途次）

何故蘇軾兄弟は繰り返し「夜雨對牀」を詠んだのか。これには兄弟のある過去が關係する。これについて、蘇轍詩ⅰ「逍遙堂會宿二首」（以後ⅰ「逍遙堂」と略）の引（序のこと）を擧げて說明したい。

轍幼從子瞻讀書、未嘗一日相舍。既壯、將遊宦四方、讀韋蘇州詩、至「安知風雨夜、復此對床眠」、惻然感之、乃相約早退爲閑居之樂。…

轍　幼きより子瞻に從ひて書を讀み、未だ嘗て一日として相舍かず。既に壯となり、將に四方に遊宦せんとして、韋蘇州の詩を讀むに、「安んぞ知らん　風雨の夜、復た此に對牀して眠らんと」に至りて、惻然として之に感じ、乃ち早く退きて閑居の樂しみを爲さんことを相約す。…

若い頃、立身の志を抱き勉學に勵んでいた兄弟は、ある日韋應物の詩と出會う。兄弟に深い感動を與えた作品とは、韋應物「示全眞元常」であった。

余辭郡符去、爾爲外事牽。寧知風雪夜、復此對牀眠。[8] 始話南池飲、更咏西樓篇。無將一會易、歲月坐推遷。

余は郡符を辭して去り、爾は外事の爲に牽かる。寧ぞ知らん　風雪の夜、復た此に對牀して眠らんと。始めに話る南池の飲、更に咏ふ　西樓の篇。一會を將て易きとする無かれ、歲月　坐ろに推遷す。

滁州刺史の職を辭し閑居の身となった韋應物が、朝廷で活躍する外甥の沈全眞と趙元常に再會した時に詠んだ詩である。だがこの再會は一時的なものに過ぎなかった。牀をならべて、南池や西樓での會飲の樂しみを語りつつ、この樣な交歡の機會を得ることは容易ではないと戒め、再會叶わぬまま歲月が空しく過ぎるだろう、と想像する。甥たちとの再會を喜びながらも、確實に訪れる別れを嘆く。

本格的な官僚生活に入る前に、蘇軾兄弟は韋詩を讀み、官途で必然的に訪れる離別の時を知った。如何に親しい閒柄であろうと、共に官途に就けば必ず別れの時が來る。その樣な狀況を想像し、兄弟は「惻然」とした。だがその悲しみは、同時に、共に過ごす時閒の尊さと喜びを再認識させた。だからこそ、兄弟は今後の離別を悲しむだけでなく、更に先の將來を見据え、早く致仕して共に閑居の樂しみを爲そうと約束し、離別の悲しみを乘り越える爲の兄弟の絆を作り上げたのである。それは、中央での榮達を望み續けては實現し得ない約束だった。冒頭で擧げた①「辛丑十一月」で、年若い兄が弟に榮達の志を戒めたのも、一刻も早い約束の實現を願えばこその言葉である。蘇轍のいう「閑居之樂」が、韋詩の「夜雨對牀」を指すのは明白だろう。兄弟たちにとって、「夜雨對牀」は單なる雨夜の情景でなく、相手と過ごす喜びを象徵するのである。

明らかに、蘇軾兄弟は韋應物から多大な影響を受けている。だが韋應物と兄弟とでは、將來に對する態度が大きく異なる。兩者共に親しい者との「夜雨對牀」の實現を願うが、韋應物はその可能性を「寧知風雪夜、復此對牀眠」と悲觀し、兄弟は「相約早退爲閑居之樂」と强く望んでいる。筆者が考えるに、兩者の差異は、「夜雨對牀」に關する約束の有無にある。韋應物と甥たちの間には何も約束がなく、その賴りなさが將來を悲觀させる。對して兄弟は「夜雨對牀」の實現を約束した上、①「辛丑十一月」に始まる各「夜雨對牀」詩を通して、繰り返しその約束を確認している。ここで「示全眞元常二生」での韋應物と、i「逍遙堂」引に見える蘇軾兄弟の「夜雨對牀」に關する經驗を時系列に沿って示せば、次の樣になる。

韋應物：現在＝離れた相手と再會、「夜雨對牀」の實現→一時的なものに過ぎないと認識→再會できるか否か不明の將來を悲觀（⇓將來＝離別の狀態が繼續すると豫想）

蘇軾兄弟：現在＝出仕後の離別を强く認識・「夜雨對牀」を約束⇓將來＝早くに致仕→「夜雨對牀」の實現（長く繼續することを望む）

蘇軾は弟以外の人間との「夜雨對牀」も描いたが、どれも過去又は現在の經驗であり、蘇轍と約束した樣な、期日が確定されない將來として描いた例は一つもない。[9] また蘇轍は兄以外の相手との「夜雨對牀」に言及していない。嘗て交わした約束によって、兄弟は「夜雨對牀」を、共有する相手は弟（兄）であり、その實現の場は將來と考え、他者と經驗してもそれは一時的なものに過ぎない、と明確に區別していたことが窺える。

但し兄弟の十二首中、三首がこの圖式から外れることを斷わっておきたい。蘇軾の③「初別子由」「秋眠我東閣、夜聽風雨聲」は、その前の作②「子由將赴南都」制作時を回想したもので、「夜雨對牀」を過去のこととして描く。蘇轍のv「神水館」「夜雨從來相對眠、茲行萬里隔胡天」も過去を回想したものと推察される。ii「舟次磁湖」「夜深魂夢先飛去、風雨對牀聞曉鐘」は、黃州に左遷された兄を訪れる途中、激しい風雨に阻まれ難儀し、せめて夢の中で先に再會したいという願いを詠う。この「風雨對牀」は未然のことであるが、實現の場を夢の中とし、將來長期に亘る實現を願う譯ではないので、兄弟本來の考えからやや外れている。他の作品と同樣に兄弟の親愛の情を示してはいるが、議論を明確にさせる爲、これら三首は今後の考察對象から外したい。

ところで、冒頭で指摘したように、蘇軾兄弟が韋應物の詩に初めて着目した譯ではなく、唐代既に韋詩に倣った作品が存在した。筆者が確認し得た限りでは、唐の「夜雨對牀」詩は韋詩以外に四首ある。[10]

白居易「雨中招張司業宿」［「夜雨對牀」は將來のことである］

能來同宿否、聽雨對牀眠。
能く來たりて同に宿せんや否や、雨を聽き　對牀して眠らん。

牟融「樓城敍別」［現在］

屈指年華嗟遠別、對牀風雨話離愁。
年華を屈指し　遠別を嗟す、對牀し　風雨に離愁を話る。

鄭谷「谷自亂離之後在西蜀半紀之餘、多寓止精舍、與圓昉上人爲淨侶。

昉公於長松山舊齋、嘗約他日訪會。勞生多故、遊宦數年曩契未諧、忽聞謝世、愴吟四韻以弔之」［過去］

毎思聞淨話、雨夜對禪牀。[11]

毎に思ふ　淨話を聞き、雨夜　禪牀を對せしを。

韋莊「寄江南逐客」［過去］

記得竹齋風雨夜、對牀孤枕話江南。

記し得たり　竹齋　風雨の夜、對牀　孤枕　江南を話るを。

四例中、三例で「夜雨對牀」は過去または現在の出來事である。つまり韋應物同樣已然の經驗として描いており、將來の場として描くのは白居易のみである。雨降る夜、白居易は張司業（張籍）に向けて「これから泊まりに來て雨を聞きつつ牀を竝べて眠りませんか」と誘いかける。だが將來とは言っても目前のことであり、蘇軾兄弟の樣な、期日の定まらない、漠然とした將來のことではない。白居易にとって、「夜雨對牀」とはあくまで一時的な樂しみである。唐詩との比較によって、「夜雨對牀」に將來の理想を託したのは蘇軾兄弟獨自の發想であると分かる。「夜雨對牀」を描いたのは韋應物に始まるが、長期に亘って繰り返し詠い、特別の意味を與えたのは蘇軾兄弟であった。

Ⅰ－2．夜雨と詩人の關係―「夜雨對牀」と「聞雨」詩

「夜雨對牀」は、韋應物の詩に始まる親愛表現である。では、それは韋應物が獨自に發想したものなのだろうか。筆者はそうではないと考える。何故なら、唐代の詩人たちが雨音を聞く行爲自體に關心を寄せた樣子が、韋詩と前後して登場する類似の表現から知れるからだ。それが「聞雨」「聽雨」という詩語である（以下、關連作品を「聞雨」詩と總稱する）[12]。勿論他にも雨を聞く描寫はあるが、ここではこれらの詩語を手掛かりに、唐詩に表れる「夜に雨を聞くこと」の特徵を考察したい。

『全唐詩』に據れば、「聞雨」と「聽雨」は共に十八例あり、特に雨夜を描く作品に限れば、共に十一例が該當する[13]。用例全體に占める夜雨の割合の高さから、唐代詩人が雨を聞く場の多くは夜だったと推察できる。

唐代「聞雨」詩中、雨夜の例を分析すると、主に二つの類型に概括できる。①雨音を聞きながら孤獨な現狀を自覺し、離れた故人、家人、故鄕等を想って懷かしむもの。②雨音を聞く中、榮達や報國を望みながら叶わず老境に到った自身の不遇を嘆き、孤憤を抱えるもの。前者には想いを寄せる他者が存在する點で「夜雨對牀」に通じるが、後者は憂愁の原因が自分自身にある。

王建（一に司空圖とも）「聽雨」（①の例）

半夜思家睡裏愁、雨聲落落屋簷頭。

半夜　家を思ひて　睡裏に愁ふ、雨聲　落落　屋簷頭。

武元衡「夜坐聞雨寄嚴十少府」（②の例）

多負雲霄志、生涯歲序侵。風翻涼葉亂、雨滴洞房深。

負くこと多し　雲霄の志、生涯　歲序に侵さる。風翻り　涼葉亂れ、雨滴　洞房に深し。

唐代「聞雨」詩は、概ねこの樣に憂愁の色彩を帶びる。憂愁を意識さ

せる要素が、夜の雨音にあったのは閒違いない。當時の雨降る夜を想像するに、雨雲が空一面に垂れこめ暗闇が廣がり、雨音が聞こえるばかりの、暗くもの寂しいものだったことだろう。そして、こうした雰圍氣が、詩人にある發想を齎したのではないか。卽ち、他との繫がりが斷たれ、自分のいる場だけが隔絕された樣に感じる閉塞感である。この閉塞感が、自身の孤獨を强く意識させ、ある時は離れた他者への思慕、ある時は自身の現狀への嘆きを意識させた。換言すれば、夜の雨音は、詩人に自己內省を促す働きを果たしたのである。

「夜雨對牀」と「聞雨」は、夜、雨音に耳を澄ますという點で共通する。よって、「夜雨對牀」は韋應物が獨自に且つ忽然と獲得した親愛表現というよりも、寧ろ唐代詩人の、雨音を聞くことへの關心の深まりを物語る一例と捉えることが適當ではないだろうか。

但し、兩者の閒には明確な違いがある。最大の相違は、「聞雨」詩が、雨夜＝獨りで過ごす憂愁の場とするのに對し、「夜雨對牀」では、雨夜＝二人（複數）で共有される、喜ばしき場とする點である。雨夜に對する捉え方が全く違う。これは、閉鎖的空閒たる雨夜を異なる二つの方向から捉えた爲であろう。一方では、閉鎖されるが故に、他者との繫がりを絕たれ、孤獨を深めるのに對し、一方では閉ざされた空閒であるからこそ、それを共有する者にとっては特別親密な場となるのである。蘇軾兄弟が韋應物の「夜雨對牀」に深く感銘を受け、將來の理想を託したのも、雨夜という空閒が形成する特別な親密さに心惹かれたからではないだろうか。

もう一つの相違點は、夜雨を經驗する時點の違いである。前揭したように、唐代の「夜雨對牀」詩は、過去の經驗として描かれることがあり、詩人はその喪失を悲嘆した。それに對し、「聞雨」詩には「過去に雨音を聞いて抱いた感情を思い出す」という用例がない。夜雨は必ず現在の情景として描かれ、詩人はその情景に觸發されて何らかの感情を抱くのである。

前後して登場した「聞雨」詩と「夜雨對牀」詩は、唐代詩人の、夜雨への關心を表す表現という點で共通するが、その內容は大きく異なっていた。それは、雨夜の持つ性質＝閉鎖性に對する、肯定否定兩側面の心情を反映していた爲である。また、雨の夜の情景が現在のものとして描かれるか否かという違いがある。これは蘇軾の「夜雨對牀」詩の特徵と關わることであり、三章で詳述したい。

二．「夜雨對牀」―蘇軾兄弟の心を繫いだもの

若い頃に「夜雨對牀」の實現を約束した蘇軾兄弟は、その後本格的に官僚生活を開始した。生涯に亘る官僚生活で、時に異なる任地へ赴任し或いは別所に左遷され、兄弟は幾度も別れを經驗した。まさに、嘗て韋應物の詩を讀み想像した通りの狀況である。官僚にとって離別は必然であり、また北宋という時代に鑑みれば尙更不可避だったとも言える。當時朝廷では官僚たちが舊法黨・新法黨に分かれ熾烈な權力鬪爭を展開しており、兄弟もこの政爭に卷き込まれた。中央の災禍を逃れようと、兄弟は幾度か自ら願い出て地方へ赴任するが、結局は逃れきれずに二度の左遷を經驗する。蘇軾の一度目は元豐年閒の黃州左遷、二度目は紹聖・元符年閒の嶺南・海南左遷である。蘇轍は兄と同じ時期に、始め筠州に流され、二度目には雷州まで流された。

前揭した蘇軾兄弟の「夜雨對牀」詩一覽を見れば、その殆どが離れ離れの時期又は別れの場での作と分かる。その時々において、兄弟は韋詩を讀んだ過去を追想し、「夜雨對牀」の約束を改めて思い遣った。

そして「夜雨對牀」の約束を確認することで、別れを悲嘆するだけでなく、將來の再會に希望を託したのである。

蘇軾兄弟の「夜雨對牀」に込めた思いは各詩から窺えるが、ここでは蘇軾詩⑤「初秋寄子由」（以後⑤「初秋」と略）からその心情を探りたい。

百川日夜逝、物我相隨去。惟有宿昔心、依然守故處。
憶在懷遠驛、閉門秋暑中。藜羹對書史、揮汗與子同。
西風忽淒厲、落葉穿戶牖。子起尋袂衣、感歎執我手。
朱顏不可恃、此語君莫疑。別離恐不免、功名定難期。
當時已淒斷、況此兩衰老。失途既難追、學道恨不早。
買田秋已議、築室春當成。雪堂風雨夜、已作對牀聲。

百川　日夜逝き、物我　相隨ひて去る。惟だ有り　宿昔の心、依然として故處を守る。憶ふ　懷遠の驛に在りしとき、門を閉ざす秋暑の中。藜羹　書史に對し、汗を揮ふこと　子と同じくす。西風　忽として淒厲たり、落葉　戶牖を穿つ。子　起ちて　袂衣を尋ね、感歎して我が手を執る。朱顏　恃むべからず、此の語　君疑ふこと莫かれ。別離　恐らくは免れず、功名　定めて期し難し。當時　已に淒斷、況や　此の兩つながら衰老せしをや。途を失すれば　既に追ひ難し、道を學ぶに　恨む　早からざるを。買田秋　已に議し、築室　春　當に成るべし。雪堂　風雨の夜、已に作す　對牀の聲。

冒頭二句、自分を含め萬物は變化し續けるものだ、との見解が語られるが、直後自分の心中には不變の思いがあるという。それこそが嘗て弟と交わした「夜雨對牀」の約束だった。

五句目から始まる回想の場は、嘉祐六年（一〇六一）秋のこと、既に科擧に及第していた兄弟は、更に上級官吏の試驗（賢良方正能直言極諫科）に應じる爲、開封南門外にある懷遠驛に寄寓し、試驗に備えていた。當時については蘇軾の⑥「感舊詩」の序にも言及がある。

嘉祐中、予與子由同舉制策、寓居懷遠驛、時年二十六、而子由二十三耳。一日、秋風起、雨作、中夜翛然、始有感慨離合之意。

嘉祐中、予　子由と同に制策に舉せられ、懷遠驛に寓居す、時に年二十六、而して子由は二十三なるのみ。一日、秋風起こり、雨作る、中夜翛然として、始めて離合の意を感慨する有り。

十一句目、寒さを凌ごうと袷を求めた蘇轍は、俄かに感歎し兄に對して次のように述べる。「若さはそう長くは保てない、また今後別れは避けられず、榮達も期待できまいよ」と。立身出世を志し勉學に勵んでいたにも關わらず、突如その實現を悲觀視する。突然の悲觀は、蘇轍の言葉「別離恐不免」に原因があると考えられる。風雨の夜に、官途に就けば離別の時が必ず來ると思い到った兄弟は、仕官自體に否定的な感情を抱いたのではないか。兄弟にとって離れ離れの狀態は、それまでの努力を虛しく感じる程に辛いことだったのではないだろうか。裏を返せば、兄弟は何よりも共にいることを重視していたからこそ、「夜雨對牀」の約束を交わしたのである。

さて、⑥「感舊詩」序で述べる「離合」に對する感慨は、前掲した

蘇轍のⅰ「逍遙堂」引が語る、韋詩を讀んで沸き起こった思いと相通じる。また⑤「初秋」では、「唯有宿昔心、依然守故處」のすぐ後から懷遠驛の回想が始まる。これらより、兄弟の作品には明確な記述はないが、韋詩を讀み、「夜雨對牀」の約束をした場とは、この懷遠驛であったと推察できる。[14]

⑤「初秋」に戻れば、回想の後、蘇軾は離れ離れの現狀を再確認するが、結句、遠からぬ將來「夜雨對牀」が實現されるだろうと期待しつつ締め括る。雪堂は、當時黃州貶謫の身だった蘇軾が東坡に築いた建物で、それは官界から完全に身を引こうという決意の表れでもあった。實際には、兄弟共に罪人の身で行動・居住の自由は制限されており、蘇轍が兄のもとへ移り住んで共に暮らすのは困難であった。にも關わらず、詩では實現への不安を露も見せず、將來へ向けて膨らむ期待を述べて締め括る。ここには、却って現實を乘り越えようとする、蘇軾の思いの强さが表れているのではないだろうか。

本詩では視點が現在→過去→現在→未來と移り、時系列に從わず、蘇軾の意識に沿った變則的な軌跡を辿る。だが不規則な流れの中、全ての時點において、蘇軾の心中には「夜雨對牀」の約束が存在している。この約束が全ての場を貫く軸となり、遠く離れた弟との心情を繋ぎ合わせる紐帶の役割を擔うのである。

自分の意識に任せて過去・現在・將來の各時點を動く描寫は、蘇軾以前、既に存在した。例えば晚唐の李商隱「夜雨寄北」、

君問歸期未有期、巴山夜雨漲秋池。何當共剪西窗燭、却話巴山夜雨時。

君　歸期を問ふも　未だ期有らず、巴山　夜雨　秋池漲る。何當(いつ)か　共に西窗の燭を剪(き)りて、却りて話さん　巴山　夜雨の時。

李商隱も⑤「初秋」の蘇軾同樣、夜雨に接して相手を想う。現在の雨降る情景を通して、過去のやり取りを回想しつつ相手を想い、[15]更に將來再會の後、懷かしい過去として孤獨な現在を回想する樣子を想像する。構成は、過去→現在→將來→その時點で過去となった現在、と複雜な流れを持つ。だが李商隱の場合、夜雨は本人が經驗するだけで、相手と雨の間には直接的な關わりがない。李商隱と相手を繋ぐのは、過去・現在・將來と離れて尙寄せ合う親愛の情だけである。一方蘇軾兄弟の場合、自分達の想いを特定の場＝夜雨に託し、これを理想的將來の象徵と見做した。そして「夜雨對牀」の實現を願い續けることによって、相手への思いを一層深めていった。兄弟の「夜雨對牀」は、將來の場であるが故に、現在離れた境遇にある互いの心を繋ぐ機能を持ったのである。[16]

兄弟が、離別の場、或いは既に離れた狀況で詠んだ「夜雨對牀」詩は、前揭の作品の他にも、例えば⑦「東府雨中別子由」「對牀　定めて悠悠、夜雨　空しく蕭瑟たらん（對牀定悠悠、夜雨空蕭瑟）」やⅰ「逍遙堂」其一「逍遙堂後　千尋の木、長らく送る　中宵　風雨の聲。誤喜す　對床　舊約を尋ぬると、知らず　漂泊して彭城に在ると（逍遙堂後千尋木、長送中宵風雨聲。誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城）」が擧げられる。だが、これらの作品と正反對の狀況、卽ち一緖にいる場合でも、兄弟は將來「夜雨對牀」を實現したいと願う詩を詠んだ。蘇轍詩ⅳ「五月一日同子瞻轉對」[17]（以後ⅳ「五月一日」と略）の前半四句を擧げる。

羸病不堪金束腰、永懐江海舊漁樵。對牀貪聽連宵雨、奏事驚同朔旦朝。

羸病　堪へず　金の束腰、永らく懐ふ　江海の舊漁樵。對牀し貪聽す　連宵の雨、奏事　驚く　朔旦の朝を同にするを。

元祐三年（一〇八八）、舊法黨による治世、所謂「元祐の更化」の時期の作である。當時兄弟も重用されて中央で出世を重ね、蘇軾は翰林學士兼侍讀、蘇轍は戶部侍郎の地位にあった。後に蘇軾は禮部尚書、蘇轍は尚書右丞まで出世する。こうした生涯最盛の時にあって、蘇轍は逆に「夜雨對牀」に心を寄せていた。第三句「對牀貪聽連宵雨」で、現在兄弟で連夜の雨を聞く樣子を描くが、蘇轍は「夜雨對牀」の約束が實現したとは考えていないようだ。首聯で「羸病不堪金束腰、永懐江海舊漁樵」と身體の衰えを自覺し、退隱の生活に心寄せる樣子からもそう推察できる。つまり、あくまで蘇轍は、致仕後の閑居の中での「夜雨對牀」の實現を望んでおり、朝廷で政務に携わる中で兄と雨夜を過ごす狀況は、閑居の願いを一層募らせることになったのである。兄弟揃って轉對を務める現實はそうした願いと遠く隔たったもので、蘇轍はそれを改めて認識し、驚くのである。

蘇軾も弟同樣、單に一緒にいるだけでは不十分だと考えた樣子が、「書出局詩」[18]（『文集』卷六十八）題跋から窺える。

今日局中早出、陰晦欲雪、而子由在戶部晩出、作此數句。忽記十年前在彭城時、王定國來相過、留十餘日、還南都。時子由爲宋幕、定國臨去、求家書、僕醉不能作、獨以一絕與之。云「王朗西去路漫漫、野店無人霜月寒。淚濕粉牋書不得、憑君送與卯君看」。卯君、子由小名也。今日情味雖差勝彭城、然不若同歸林下、夜雨對床、乃爲樂耳。元祐三年十月二十三日。

今日局中より早く出づるに、陰晦く雪ふらんと欲す、而して子由は戶部に在りて晩く出づるに、此の數句を作る。忽ち記す十年前彭城に在りし時、王定國來たりて相過ぎり、留まること十餘日にして、南都へ還る。時に子由は宋幕爲りて、定國去るに臨み、家書を求むるも、僕醉ひて作る能はず、獨り一絕を以て之に與ふ。「王朗　西に去り　路漫漫、野店　人無く　霜月寒し。淚に濕る粉牋　書くことを得ず、君に憑りて送り　卯君に看しめん」と云ふ。卯君は、子由の小名なり。今日の情味差や彭城に勝ると雖も、然るに同に林下に歸り、夜雨對床、乃ち樂しみを爲すに若かざるのみ。元祐三年十月二十三日。

iv「五月一日」と同年の作である。蘇軾はふと十年前の彭城（徐州）での經驗を回想する。そして、嘗ての離れ離れだった狀況に比べれば、共に朝廷で勤める現在の方が良いとしつつ、やはり退隱して「夜雨對牀」の樂しみを爲すには及ばない、と結論付ける。ここには當時の嚴しい權力鬪爭に對する嫌惡感も反映されていると考えられる。[19] この樣に、二人の「夜雨對牀」詩の分析から、兄弟は身を置く場所が地方であろうと中央であろうと關わりなく、致仕後の閑居の樂しみである「夜雨對牀」の實現を願い續けたと分かる。

三．月との比較に見る「夜雨對牀」の特徴

Ⅲ－1．月との違い①―普遍性と限定性

以上、諸作品の分析を通して蘇軾兄弟の「夜雨對牀」の特徴を二點擧げた。一つはそれが兄弟にとって、未だ果たされない願いであること、もう一つは將來實現しようとする想いが、結果的に互いの心を一層結びつけたことである。韋應物によって親密な場として描かれ、更に蘇軾兄弟によって異なる意味が付與された「夜雨對牀」は、單なる情景に留まらず、兄弟にとって、理想的將來の象徴となるに到った。一章で指摘したように、雨夜の室内という閉鎖的空間は、共有する者に特別な親密さを齎し、兄弟はそこに互いの心が通い合う理想の境地を見出したのである。

蘇軾兄弟の「夜雨對牀」の獨自性をより明確にする爲、本章では月を詠んだ詩と比較したい。中國の詩歌には、離れた相手への親愛の情を託す存在として、しばしば月が登場した。夜空に輝く月を望み、遙か彼方の夫や家族、友人もきっと同じ月を望んでいるだろう、と想像する。或いは古跡で月を觀賞し、嘗てこの地で月を仰いだ古人に思いを馳せる。前者は空間的に隔たった相手を、後者は時間的に隔たった相手を、月を通して思い遣る。[20]

月を通して空間を隔てた相手を想う例は多い。早期の例を擧げれば、劉宋・鮑照「翫月城西門廨中詩」、

三五二八時、千里與君同。
三五二八の時、千里　君と同じくす。

千里も隔たる相手と今この月を共にすると想像する。或いは、白居易「自河南經亂關內阻饑、兄弟離散各在一處、因望月有感聊書所懷、寄上浮梁大兄・於潛七兄・烏江十五兄、兼示符離及下邽弟妹」、

時難年荒世業空、弟兄羈旅各西東。…共看明月應垂淚、一夜鄉心五處同。
時難く　年荒れて　世業空し、弟兄羈旅　各西東。…共に明月を看　應に淚を垂るべし、一夜の鄉心　五處同じなり。

戰亂の爲に散り散りとなってしまった兄妹に對して、今頃皆月を見て自分と同じ望鄉の念を抱いているだろう、と想像する。ここでは自分と相手が同じ思いだと考えており、先の鮑照の詩よりも、雙方の繫がりがより强く意識されているといえる。

一方、時間的に遠く隔たった相手を想って詠む詩がある。「月下獨酌」を始め月に關する詩を多く詠んだ詩人・李白の「夜泊牛渚懷古」、

牛渚西江夜、青天無片雲。登舟望秋月、空憶謝將軍。
牛渚　西江の夜、青天　片雲無し。舟に登り　秋月を望み、空しく憶ふ　謝將軍。

月を通して、嘗て同じ牛渚にて月を望んだ謝尙の故事を想起する。晉の詩人袁宏がこの地で自作の詩を朗誦した所、偶然謝尙に出會い才能を認められたが、袁宏に劣らぬ詩才を持つ自分は、謝尙の樣に才能を見出してくれる人に出會えない、と古人と比較して自身の現狀を嘆く。

これら二種類のパターンから、月の特徴として二つの普遍性が指摘

できる。まず、どこにいようとも月光は遍く届き、その姿を望むことができる。故に月は空間的普遍性を持つ。更に、太古の昔より存在し、遠い先の未來まであり續ける悠久性、時間的な普遍性を持つ。空間的・時間的普遍性を持つ月に對して、古來人々はある想いを抱いた。卽ち、月とは離れた相手と自分の心を結びつけてくれる存在なのだと。そうして、夜の暗闇にあって確かな光を放つ月を通して相手を思い遣る詩が、絶えず創作されたのである。

普遍的存在である月と比較するに、雨は極めて限定的な現象である。遍く地を照らす月に比べ、雨の及ぶ範圍ははるかに狹く、又月の存在の悠久さに比べ僅かな時間しか持續しない。更に夜雨の場合、Ⅰ－2「聞雨」詩で言及したような特徵がある。空は一面雨雲に覆われ、黑々とした暗闇が廣がるばかり、聞こえるのは寂しい雨音だけの空間。唐代「聞雨」詩の夜雨は、外界と隔絶されたような閉塞感を詩人に齎し、月とは反對に、他者との繫がりを斷つ存在だった。つまり、雨自體に時間的空間的限定性があり、更に夜雨獨自の閉鎖性があった。この限定性と閉鎖性が重なった時、經驗する人間は一層限られた世界に封じ込められ、心を通わせる者がいなければ、强烈な孤獨感を生み、心の通じる誰かと共有する時には、極めて親密な感情を醸成したのだと考えられる。

普遍的存在である故に特定の詩人による特別な意味づけが爲されなかった月に對して、閉鎖的空間を作り出す夜雨は、韋應物によって個人的な經驗に基づく親密な場として見出され、蘇軾兄弟に到って從來の詩人とは異なる特殊な意味が付與された。兄弟獨自の限定要素、共有する相手の限定及び理想的將來という意味付けの限定、これら二つの要素が夜雨の持つ閉鎖性を一層際立たせ、「夜雨對牀」は兄弟獨自の、特別な親愛表現へと昇華したのである。

Ⅲ－2．月との違い②―實景から切り離されて描かれるか否か

「夜雨對牀」と月との違いは、目前の情景から切り離されて描かれるか否か、という點からも指摘できる。月の場合、必ず、實際の月に接して相手への想いを募らせる、という形で描寫される。換言すれば、相手を想起する前提として、現實の月の存在が不可缺となる。人々の視點の基準は現在にあり、過去や將來へ自在に意識を向かわせるにしても、現在の月が契機となる。前節の李白の詩がその例である。白居易の「夜雨對牀」は、現在の雨を通してその樂しみを思いついた。しかし「夜雨對牀」詩には、詩人が夜雨に接さずとも、つまり作中夜雨が描寫されなくても、相手を思い遣る場合がある。

Ⅰ－1で擧げた唐詩の用例では、鄭谷と韋莊が「夜雨對牀」を過去の經驗として回想している。「夜雨對牀」は單なる雨夜の情景に留まらず、麗しき過去の象徵として描かれ、現在の情景と關わりなく、離れた相手を思うことでその特定の情景を想起したのである。

既述した樣に、唐代詩人とは異なり、蘇軾兄弟は「夜雨對牀」を理想的將來の象徵と捉えた。兄弟がかの約束を思う時、現在の夜雨が媒介となる例は少なくない。蘇軾の⑥「懷舊詩」序を見ると、韋詩を讀んで約束を交わした懷遠驛の夜は雨だった。⑤「初秋」の「雪堂風雨夜、已作對牀聲」や蘇轍ⅳ「五月一日」の「對牀貪聽連宵雨」も、現在降っている夜雨を通して將來を想う、という二段構成を持ち、現在の夜雨が兄弟の想いを一層搔き立てる存在となっていた。だが一方で、現在の雨を介さずに、まだ經驗していない將來を想起した詩がある。これは蘇軾だけに見られる特徵で、三作品が該當する。一つは冒頭に

擧げた①「辛丑十一月」、一つは「書出局詩」題跋。殘る一つは、元豐二年（一〇七九）に起きた筆禍事件、「烏臺詩案」に因って投獄された際、死を覺悟し、密かに人に賴んで蘇轍に送った、④「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、以遺子由、二首」其一である。蘇軾は四十四歲、「夜雨對牀」の約束を交わしてから十八年の歲月が經っていた。

聖主如天萬物春、小臣愚暗自亡身。百年未滿先償債、十口無歸更累人。是處青山可埋骨、他時夜雨獨傷神。與君今世爲兄弟、又結來生未了因。

聖主　天の如く　萬物　春なるに、小臣　愚暗にして　自ら身を亡ぼす。百年　未だ滿たざるに　先ず債を償ひ、十口　歸するところ無く　更に人を累せしむ。是る處の青山　骨を埋むべし、他時の夜雨　獨り神を痛ましめん。君と今世に兄弟と爲る、又た結ばん　來世　未了の因。

冒頭で「萬物春」というも現在の情景は具體的に描かれず、從って雨の有無も一切不明である。情景が不明な中、詩人の心中にはもはや再會叶わぬ弟への想いが去來していた。六句目「他時夜雨」は、一見單に將來の雨降る夜の情景だが、兄弟にとって情景以上の意味があったことは言うまでもない。蘇轍が雨を聽きつつ孤獨に夜を過ごす將來とは、兄弟が理想としたものと正反對で、そこには自分の死をさておいて相手の孤獨な將來を悲しむ、蘇軾の眞摯な愛情がある。蘇軾は過去の約束を大切に思い續けたが、それを果たせず、弟に「獨り神を痛ましめ」る未來を齎すことを悲しんだのである。

韋應物の詩との出會いを原體驗に持つ兄弟は、その時點で「夜雨對牀」に對して理想的將來の象徵というイメージを確立させていた。更にその後幾度も經驗した雨中の離別が、約束への想いを深めさせたと考えられる。原體驗及びその後の經驗が厚く蓄積された結果、現在の情景を介するまでもなく、今生の別れに直面した蘇軾にかの約束を思い出させたのである。ここでいう「他時夜雨」の眞意は、蘇轍にしか傳わらない。蘇軾が過去に約束を交わし、將來を共にしたいと願った相手は蘇轍一人だからだ。既述した樣に、蘇軾は蘇轍以外の相手との「夜雨對牀」を將來の場として描くことは一切なかった。蘇軾にとって、「夜雨對牀」とは本來的に弟に向けた親愛表現であり、この限定性故にイメージは確立され、更に長い年月の閒の蓄積によって一層强化された結果、月と異なり現在の情景を介さずに將來を描く、極めて珍しい表現となったのである。

Ⅳ. おわりに

兄弟が生涯詠い續けた「夜雨對牀」の願いは、遂に實現されることがなかった。蘇軾兄弟が最後に「夜雨對牀」詩を詠んだのは元祐年閒（一〇八六―一〇九三）、中央での榮達期である。紹聖元年（一〇九四）以降の嶺南・海南島での貶謫時代、從來と變わらず多くの詩を贈りあったにも關わらず、「夜雨對牀」には一言も觸れていない。代わりに兩者を繫ぐ存在として描かれたのが月だった。紹聖四年（一〇九七）、貶謫の地海南島にいた蘇軾は、海を隔てた雷州（廣東省）にいる蘇轍に向けて「十二月十七日夜坐達曉、寄子由」（『詩集』卷四十一）を詠んでいる。

雷州別駕應危坐、跨海清光與子分。
雷州別駕　應に危坐すべし、海を跨ぎ　清光　子と分かたん。

離れ離れとなった今、せめて隔てなく照らす月光を君と共有しようと詠う。詩中に再會を願う言葉はなく、月に相手との繋がりを託す。海南島で齢六十を迎え、蘇軾は「夜雨對牀」を最早實現不可能と考えたのだろう。實際、この地で生きようという思いを幾度か詩に詠んでいる。[21]

だが蘇軾の豫測とは裏腹に、その後政治情勢の轉換が生じ、それに伴い元符三年（一一〇〇）、蘇軾は赦されて海南島から海を渡り、次いで名譽を回復、居住の自由が與えられる。ここに到って兄弟は約束を實現しようと行動を起こす。翌年の建中靖國元年（一一〇一）二月、蘇轍は兄に手紙を送り、許昌（河南省）で共に暮らそうと提案し、兄も喜んで同意する。[22]だが同年六月、蘇軾は弟との再會を果たせぬうちに病を得て世を去る。かくして兄弟が「夜雨對牀」を實現する機會は永遠に失われてしまった。兄の死後、蘇轍は一人許昌にて杜門謝客の生活を送り生涯を閉じる（一一一二年）。皮肉にも蘇軾が嘗て想像した、「他時夜雨獨傷神」が現實のものとなってしまったのだ。蘇轍は亡兄の爲に墓碑銘や祭文を何篇かものしたが、内一篇で「夜雨對牀」を約束した過去に觸れ、實現を目前にして約束を果たせず死んだ兄への深い悲しみを語っている。[23]

「夜雨對牀」は實現されなかったが、兄弟の關連作品は後世廣く知られ、他の詩人に影響を與えた。例えば、黄庭堅の紹聖二年（一〇九五）の作「和答元明黔南贈別」、

萬里相看忘逆旅、三聲清淚落離觴。朝雲往日攀天夢、夜雨何時對榻涼。
萬里　相看て　逆旅を忘れ、三聲　清淚　離觴に落つ。朝雲　往日　天を攀じる夢、夜雨　何れの時にか榻を對して涼まん。

左遷先へ向かう道中ずっと付き添ってくれた實兄大臨、字は元明に對し、再會の願いを「夜雨何時對榻涼」に託す。この句が蘇軾兄弟の「夜雨對牀」に基づくのは明らかだろう。黄庭堅は蘇軾の高弟としても有名であり、直接の影響關係があったとしても不思議ではない。

この様に、早くから「夜雨對牀」は兄弟間の親愛表現として浸透していたと考えられる。特に興味深い話が、南宋・王楙の「野客叢書」卷十に見える。

人多以夜雨對牀、爲兄弟事用。如東坡與子由詩引此。蓋祖韋蘇州示元眞（ママ）元常詩。寧知風雨夜、復此對牀眠之句也。然韋又有詩贈令狐士曹曰。[24]…則是當時對牀夜雨、不特兄弟爲然。於朋友亦然。…今人但知爲兄弟事、而莫知其他。蓋此詩因東坡拈出故爾。

人多く夜雨對牀を以て、兄弟の事と爲して用ふ。東坡の子由に詩を與ふるに此を引くが如し。蓋し韋蘇州の「元眞・元常に示す」詩を祖とせん。「寧ぞ知らん　風雨の夜、復た此に對牀して眠らんと」の句なり。然るに韋、又詩の「令狐士曹に贈る」有りて曰く。…則ち是れ當時對牀夜雨、特だ兄弟のみ然りと爲すにあらず。朋友に於いても亦た然り。…今人但だ兄弟の事を爲すと知りて、其の他を知る莫し。蓋し此の詩　東坡の拈出するに因るが故なる

のみ。

南宋當時、「夜雨對牀」が兄弟の情愛を表すこと、それが蘇軾兄弟に始まることが既に周知されていたと語られている。[25] 原典である韋應物を壓倒して、「夜雨對牀」とは蘇軾兄弟の表現であると認識されていた。かくして、兄弟の極めて個人的な遣り取りに始まったこの親愛表現は、後の多くの人々の心に深い影響と感動を與えることとなったのである。

注

(1) 莫礪鋒「論蘇軾蘇轍的唱和詩」(『唐宋詩歌論集』鳳凰出版社、2007年)に依れば、蘇軾と蘇轍が互いに贈った唱和詩(次韻詩・非次韻詩)の數は、蘇軾が九十八首、蘇轍は二百五十三首で計三百五十一首にのぼる。

(2) 「夜雨對牀」の語の由來は、「はじめに」で擧げる蘇軾詩①の自註「嘗有夜雨對牀之言」にある。又、二章で擧げる「書出局詩」の題跋中にも「夜雨對床」と見える。蘇軾兄弟はこの四字以外にも、「夜雨」二字で、或いは「風雨對牀」「對床夜雨」等、樣々な形で表現している。本論ではこれらの表現の總稱として「夜雨對牀」を用いることとする。

(3) 本論では一章冒頭で示す樣に、蘇軾兄弟の詩に番號を付す(①、i等)。以後、長大な詩題を省略する爲、文中で注記した上で番號+省略した詩題の形で取り上げる。

(4) 張惠民・張進「濃厚深摯的骨肉親情　蘇軾與胞弟」(『士氣文心：蘇軾文化人格與文藝思想』人民文學出版社、2005年)、付定裕「夜雨對牀：蘇軾與蘇轍的詩歌對話」(『文史雜誌』2007年3期)、姚明今・徐宇春「蘇軾〝夜雨對眠〟意象闡釋」(『海南大學學報人文社會科學版』2007年10月)等。日本で「夜雨對牀」をテーマに論じた研究は管見の限り見當たらないが、一海知義・池澤一郎『新井白石』(研文出版、2001年)は、18—25頁で蘇軾の「夜雨對牀」詩の用例を複數紹介する。

(5) 蘇軾の詩は『蘇軾詩集』(中華書局、1999年。以後『詩集』と省略)を、散文は同『蘇軾文集』(中華書局、1999年。以後『文集』と省略)を、蘇轍の作品は『欒城集』(上海古籍出版社、1987年)をそれぞれ底本とする。卷數はこれらに基づく。

(6) 蘇軾は詩以外でも「夜雨對牀」に言及している。例えば詞「滿江紅　懷子由作」「辜負當年林下意、對牀夜雨聽蕭瑟。恨此生長向別離中、添華髮」。又、「書出局詩」の題跋にも見える(注2參照)。

(7) 孔凡禮撰『蘇軾年譜』(中華書局、2005年)及び同『蘇轍年譜』(學苑出版社、2001年)に基づく。

(8) 本文は『韋應物集校注』(上海古籍出版社、1998年)に據った。見ての通り、頷聯は「風雪夜」で、兄弟が言う「風雨夜」ではない。管見の限り、これを指摘したのは、小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第一册(筑摩書房、1983年)及び一海知義・池澤一郎『新井白石』(注4參照)のみである。「風雨夜」とするのは蘇軾兄弟の詩及びその注釋、『詩話總龜』等の詩話類で、四部叢刊『韋江州集』、四部備要『韋蘇州集』、『全唐詩』、『韋應物詩集繫年校箋』(中華書局、2003年)は全て「風雪夜」とする。一方、後述する樣に、唐代既に「夜雨對牀」を模した用例が登場している。このことより、兄弟が讀んだ韋應物詩は、現在傳わる諸版本と異なるものだった可能性もある。何れにせよ今回の議論においては、蘇轍のいう「安知風雨夜、復此對牀眠」に從うこととする。

(9) 例えば卷十八「送劉寺丞赴餘姚」「中和堂後石楠樹、與君對牀聽夜雨」の「君」は劉寺丞を指し、卷四十三「雨夜宿淨行院」「林下對牀聽夜雨、靜無燈火照淒涼」は僧を相手とする。但し、蘇軾には自分たち以外の兄弟が將來「夜雨對牀」を爲す樣子を描く例が一首ある。それは卷二十三「過建昌李野夫・公擇故居」「遥想他年歸、解組巾一幅、對牀老兄弟、夜

雨鳴竹屋」で、この「老兄弟」は詩題の李野夫・公擇兄弟を指す。これより、蘇軾が將來爲される「夜雨對牀」として描いたのは、兄弟間のことに限られていたと言える。

(10) ここで擧げた四例以外にも、「雨」と明言せずに雨を描寫した可能性がある。事實韋應物は「示全眞元常」以前に詠んだ「贈令狐士曹」で、「秋簷滴滴對床寢、山路迢迢聯騎行」と、簷から滴る雨の音を二人で聽く樣子を描いている。だが今回は「雨」「對牀」が明示された詩を「夜雨對牀」詩として擧げた。

(11) 「禪牀」は座禪用の椅子を指し、嚴密には「對牀」と意が異なる。

(12) 管見の限り、六朝以前「聞雨」「聽雨」という詩語はない。但し雨の滴る樣子を通して、雨を聞くことを間接的に表す詩は六朝にもあった。例えば梁・何遜「從鎭江州與遊故別詩」「夜雨滴空堦、曉燈暗離室」。

(13) 「故宮寒泉」中「全唐詩」(http://210.69.170.100/s25/index.htm) を檢索した。

(14) 淸の王文誥『蘇文忠公詩編注集成』の、①「辛丑十一月」に對する趙次公の注は、「子由與先生在懷遠驛嘗讀韋詩、至此句惻然感之、乃相約早退共爲閒居之樂」と斷定している。

(15) 「君」が誰を指すのか、複數の說がある。妻とする說に高橋和巳『李商隱』(岩波書店、1958年)、『唐詩鑑賞辭典』(北京燕山出版社、2000年)。愛人・戀人說に周振甫選注『李商隱選集』(上海古籍出版社、1986年)、川合康三『李商隱詩選』(岩波書店、2008年)。妻と愛人雙方の可能性を指摘する說に松浦友久『詩語の諸相—唐詩ノート』(研文出版、1981年)、前野直彬『唐詩選』(岩波書店、1963年)。また『中國古典文學鑑賞叢刊 唐詩鑑賞集』(人民文學出版社、1981年) は友人とする。

(16) 白居易の「雨夜憶元九」「天陰一日便堪愁、何況連宵雨不休。一種雨中君最苦、偏梁閣道向通州」は、現在の雨を通して離れた相手を想っており、夜雨が兩者の場に存在する。だが、その雨は自分たちを苦しめる存在だと否定的に描かれる。

(17) 轉對とは、宋代、數日置きに臣下たちが政治について順に意見を奏上すること。

(18) 詩の全文は、「急景歸來早、濃陰晚不開。傾杯不能飲、待得卯君來」(『詩集』卷四十八「出局偶書」が該當作品)。

(19) 同年同月十七日、蘇軾は「乞郡劄子」(『文集』卷二十九) を奏上し、病を理由に地方官への任命を乞い、更に當時激化していた舊法黨內の派閥爭いの弊害を糾彈した。「臣近以左臂不仁、兩目昏暗、有失儀曠職之憂、堅乞一郡。…然臣終未敢起就職事者、實亦有故。…臣與故相司馬光、雖賢愚不同、而交契最厚。光既大用、臣亦驟遷、在於人情、豈肯異論。但以光所建差役一事、臣實以爲未便、不免力爭。而臺諫諸人、皆希合光意、以求進用、及光既歿、則又妄意陛下以爲主光之言、結黨橫身、以排異議、有言不便、約共攻之」。朝廷での權力爭いの激化が、蘇軾に退隱の志を一層强くさせたと考えられる。

(20) 興膳宏「唐詩における月の三つの相—王維、李賀、李商隱—」(『立命館文學』No.563、2000年) は、「最大公約數的な一つのパターン」たる月を通して自分と他者を結ぶ構圖を「月を頂點とする三角形の圖式」と述べ、そのバリエーションとして空間軸と時間軸の二種類の構圖を指摘する。又、高雲鵬「蘇軾詩詞中的月意象研究」(『中國蘇軾研究』第二輯、學苑出版社、2005年) は「和其他詩人一樣、一生沉浮宦海、漂泊異鄉的蘇軾也把月意象作爲相思、思鄉主題作品的核心意象」と述べる。兩者共、月を通じて相手を思う構圖を指摘するが、論文の主眼は王維や蘇軾らによる獨自の月の描寫にあり、相手を思う例は冒頭觸れるだけである。

(21) 例えば元符二年の作、卷四十二「被酒獨行、遍至子雲・威・徽・先覺四黎之舍、三首」其二「莫作天涯萬里意、溪邊自有舞雩風」。

(22) 『蘇轍年譜』(注7參照) の建中靖國元年二月に「二十二日、作簡、托黃寔寄與兄軾、勸軾歸潁昌相聚」と。この書を讀んだ蘇軾は「子由弟。

得黄師是（黄寔のこと）遣人賚來二月二十二日書、喜知近日安勝。…兄近已決計從弟之言、同居潁昌、行有日矣。…頗聞北方事、有決不可往潁昌近地居者。今已決計居常州、借得一孫家宅、極佳」（『文集』巻六十「與子由書十首」其八）と同意しつつ、朝廷で元祐の舊臣が排撃されている現狀を憂慮し、京師からより離れた常州（江蘇省）に住むことを提案した。

(23) 『欒城後集』巻二十「再祭二兄端明文」「昔始宦遊、誦韋氏詩。夜雨對牀、後勿有違。進不知退、踐此禍機。欲復斯言、而天奪之」。

(24) 注10參照。

(25) 實際には「夜雨對牀」は常に兄弟間で用いられた譯ではなく、陳與義「謹次十七叔去鄭詩韻、二章以寄家叔一章以自詠」其一「對床夜雨平生約、話舊應驚歲月遷」や楊萬里「送孫從之司業持節湖南二首」其二「朝陽鳴鳳祇今見、夜雨對床何日尋」の様に、兄弟以外の人間に向けた例がある。だがそれでも蘇軾兄弟の影響は無視できなかったのだろう。